

## 第12回国際橋梁会議・展示会参加と北米橋梁事情調査団に参加して

### 12th Annual International Bridge Conference and Exhibition

国際橋梁会議（IBC：International Bridge Conference）は、アメリカ圏を中心に橋梁関係者の情報交換を図る目的で行う会議で、参加各国の技術の現状、と抱えている問題点を広く行政、設計、製作架設という三者の立場から報告がなされた。

橋梁を中心として、これら三者が一同に会する機会は少なく、大変有意義なことであり、日本でもこのような会議が開催できるよう期待する。また、会場では新しい橋梁技術、実験方法、メンテナンス等に関する展示会が開かれており、米国における橋梁技術、ならびに関連する製品に触れることができた。

会議後、大型構造物先端技術センター（ATLSS）を訪れ、鋼床版の実物大疲労試験を見学する事ができた。さらに、北米とカナダの長大橋や歴史的名橋の視察と、それら橋梁のメンテナンス等の管理を行っているオンタリオ州運輸省とカリフォルニア州運輸局の訪問が許され、概要を聞くことができた。

川上 江佐夫\*



〔はじめに〕

この度、「第12回国際橋梁会議・展示会参加と北米橋梁事情調査団」（団長：関東学院大学倉西教授）に参加させていただく機会を得ましたので、橋梁国際会議・展示会の模様と北米、カナダ（トロント）の橋梁事情を簡単に報告致します。

国際橋梁会議（IBC：International Bridge Conference）は、橋梁に関する最新の情報交換を目的として毎年アメリカ国内で開かれている会議です。今年、米国ピッツバーグ市（ペンシルバニア州）で開催されました。

会議の出席者は大半がアメリカ人でしたが、ヨーロッパ諸国や韓国、中国などアジア諸国からも若干の参加者があり、設計法、材料の開発、実験方法、メンテナンス、架設方法など広い範囲で議論が行われました。

会議終了後、北米、カナダの長大橋や歴史のある橋を視察し、アメリカの橋梁技術レベルの高さを知らされ、同時に現在アメリカの技術者が直面している問題点（技術的・経済的）の深さも知ら

されました。まさにアメリカの「光りと影」を垣間見た気がしました。

#### 1. 調査日程と訪問地

調査日程は平成7年6月18日～7月2日までの15日間であり、主な訪問地は下記のとおりです。

- ・ピッツバーグ：国際橋梁会議と展示会出席  
市内橋梁視察
- ・ベツレヘム：リーハイ大学内の大型構造物  
先端技術研究センター訪問
- ・ニューヨーク：イーストリバー、ハドソン  
リバーの橋梁視察
- ・ナイアガラ：レインボーブリッジ視察  
フォール
- ・トロント：オンタリオ州運輸省(カナダ)  
訪問
- ・シアトル：橋梁視察
- ・サンフランシスコ：カリフォルニア州運輸局訪問  
と橋梁視察

\*） 橋梁部 課長（RCCM：鋼構造及びコンクリート） Esao KAWAKAMI



IBC受付ロビー前にて



リーハイ大学 ATLSS副所長ボワー博士と調査団員



レーシーマロー浮橋

〔 おわりに 〕

米国での国際橋梁会議と北米、カナダの橋梁事情調査（視察）をとおして、一番感じた事は、これから作る橋も重要ですが、先人の方々が苦勞して築かれた数多くの大切な財産をいかに有効利用し、守っていくか。『再生と補強』という事です。

国際会議の報告・研究発表会の多くを占めていたのも補修・補強に関することでした。

このたび兵庫県南部地震が発生し、構造物は大きな被害を受けました。その結果、生活道路の確保が重要であることが確認され、橋梁の大切さが再確認されました。こうした災害復興に必要な技術が補修・補強の分野であると思います。

新設橋梁もいずれは補修・補強の必要が生じてくる巡りの中で、1930～60年代に米国の吊橋技術の頂点を競って作られた橋梁が老朽化と戦いながら現在でも立派に供用されています。

日本でもその現象は表れはじめています。アメリカの真剣な取り組み方を良い手本とし、橋梁に限らず、全ての構造物に寿命の終りがくる事を再確認し、一年でも永く供用されるための技術研究・開発を進める必要性を強く感じました。



タコマナローズ橋